



年男を迎えて

公益社団法人鹿児島共済会 南風病院 名誉院長 | 末永 豊邦



今年3月に満84歳となり年男を迎える幸せを感じながら執筆しています。高校・大学の同級生の約半数が鬼籍に入っていますが、幸いにも大病することなく元気で、健康長寿の生活を楽しく送っています。

干支について学習しました。十干（甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸）と十二支（子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥）の組み合わせで干支は決まっていますが、60年に1度同じ干支の年となり、還暦60歳時には生まれた時の干支に戻る仕組みとなっています。古代の中国には陰と陽を表す「陰陽説」と“木・火・土・金・水”という「五行思想」があったのですが、その2つの思想を組み合わせたものを「陰陽五行説」と言い、それに「十干」の呼び名を当てはめ呼ぶようになったそうです。

2026年は丙午（ひのえうま）です。「丙午」は特に活気のある年とされ、新しい挑戦に光が差し、前へ進む力を感じられる1年と期待

されています。私の孫が今年、24歳の年男です。国立大学医学部6年生で、今年3月に医師国家試験を受ける予定です。医師免許を取得し将来医療界で活躍し、社会に貢献することを願っています。

人生84年を振り返ってみると、私は1942年3月に鹿児島県始良郡加治木町の父親の実家で生まれました。その時に取り上げてくれた産婆（助産師）はオソメさんという方で、鹿児島大学医学部入学後に母親と一緒に感謝と御礼の挨拶に行き、大変喜んで頂いた事を懐かしく思い出しています。

生後間もなく父親の仕事（警察官）で満州国に渡り、1945年8月15日太平洋戦争の終戦を迎え敗戦国民となりました。ソ連軍が進駐し、大人の男性の多くが極寒地のシベリアに連行抑留され、強制労働と栄養失調による多数の死者が報告されました。満州のホテルに滞在していた時には、ソ連兵2～3人が突然部屋に押し入り部屋を物色し、衣類の入った大きな籠を持ち去られたことがありました。幸いにも父親は不在で、ソ連兵による連行は免れました。その後、父親は満州から日本への引き揚げ者の引率役を引き受け、苦難の道・いばらの道を何日間も歩き続け、引き揚げ船の待つ中国の港に辿り着き、引き揚げ者が乗船し博多港に着き上陸し帰国できました。この事の功績に対して父親に内閣総理大臣より感謝状が届きました。

「末永豊彦 殿

あなたの先の大戦の終結に供う
引き場者としてのご苦労に対し
衷心より敬意を表し慰労します

平成四年六月二六日

内閣総理大臣 宮澤喜一」

帰国後は始良郡牧園町の母の実家に居候し、貧乏のどん底から這い上がるため雑貨商を営み、更に食料品店を開き、徐々に生活が安定しました。私が牧園から加治木高校への3年間と鹿児島大学医学部への6年間の計9年間のために学費や汽車通学（短期の下宿あり）の工面をしてくれた両親に心から感謝しています。

高校3年間は担任だった恩師の池田努先生から厳しい教育指導を受けましたが、クラスメイトの絆は強く、卒業後は恩師を交えたクラス会が度々開催されてきました。私が母校の同窓会会長になって以降、毎年8月の同窓会総会には恩師をはじめ、クラスメイトも参加し総会を盛り上げてくれました。恩師88歳の米寿祝いでは色紙「夢」を頂き、部屋に飾って大事にしています。

昭和41年4月から東京慈恵会医科大学附属第3病院（狛江市）でインターンをする事になりました。世田谷区烏山駅（京王線）近くの個人病院に、週2～3回の夜間当直を条件に住み込むことが出来て、最低限の生活が保障された1年間でした。大学卒業間近に習い覚えた麻雀が、他大学出身者との交流に大変役に立ちました。住み込み病院でも院長家族と麻雀卓を囲み、親睦を深めることができました。東京での1年の間に、当時世界を席卷していたビートルズが初来日しました。羽田空港で飛行機のタラップから降りる際、熱狂的なファンに出迎えられていたテレビ放映の光景も忘れられません。日本武道館でコンサートが開催されましたが、金もなく関心もなく参加していません。インターン終了近くには医師国家試験ボイコットデモ行進がありなんとなく参加したことを憶えています。

昭和42年4月に鹿大一外科（内山八郎教授）に入局しました。春の医師国家試験ボイコットのため医師免許のない無給医局員で

あったが先輩外科医より外科診療の基本の手解きを受けチームワークの大切さを学びました。秋の医師国家試験を熊本市の会場で受け合格し念願の医師免許証を取得しました。大学病院と出張先の病院で先輩達から外科手術手技を繰り返し指導してもらいました。昭和47年11月には癌研病院の西満正先生が内山先生の後任の教授として着任されました。西教授からは消化器癌手術におけるリンパ節郭清を含めた切除再建方法と臨床病理の重要性について厳しく指導を受けました。医局では食道グループに所属し胸部外科・腹部外科の難度の高い手術分野に挑むことになりました。

昭和51年4月より県立大島病院に外科部長（スタッフ4名）として出張し、24時間体制で救急医療を引き受け、また消化器手術を数多く経験（食道癌・膵頭部癌手術を含む）させてもらいました。県立病院の1年間で地域医療機関との交流の重要さと外科診療の責任者としての自覚と更なる自己研鑽に努めることを学びました。

昭和52年4月大学に帰り医局長を3年間務め、教授の教育方針の伝達、医局員の地域関連病院へのお出張派遣、同門との円滑な交流など医局運営に大変苦勞しましたが将来に向けての貴重な経験だったと思っています。

昭和57年8月より国立療養所志布志病院の副院長に就任し、馬場國昭外科部長と消化器外科と呼吸器外科の手術件数を多数経験、また急患には24時間体制で緊急手術に対応しました。当時は宿泊施設として官舎があり利用しましたが、1年の半分以上は鹿児島から陸路で約2時間を費やして通勤しました。（朝6時に出発し、夕方8時頃帰宅）。帰宅後病院から急患の緊急手術の電話連絡があり直ちに病院へ向かい緊急手術を行ったことも数多くありました。40歳代の若い頃で体力があり、家族も医療の現状を理解してくれたお陰です。

国立志布志病院の院長は、二渡久先生（加治木高校の大先輩）で地域住民からは“赤ヒゲ先生”と信頼され慕われており、医療の原点を教えていただき敬服しています。

昭和61年10月より南風病院に転勤となり現在まで約40年間働いています。県立大島病院・国立志布志病院勤務の経験に基づき、24時間診療体制とし地域医療機関からの紹介急患・救急車搬送の急患を断らず、麻酔科の協力を得て緊急手術する方針としました。手術件数が年間150件前後だったのが徐々に増加し最近では年間800件前後となっています。南風病院外科が順風満帆に経過したわけではありません。2013年8月に外科診療体制の運営について鹿大一外科と南風病院との間に異論が生じ妥協することが不可となり鹿大一外科が引き揚げました。

外科新体制の確立には大変苦勞しました。主任部長の私と部長の北園正樹医師の他には消化器内科研修医3名と当院卒後初期研修中の1名、鹿大呼吸器外科研修医1名のスタッフでスタートすることになりました。幸いに

も外来、病棟、手術において特に大きな支障なく外科チーム医療を実施することが可能でした。その後、外科専攻医としての入職、他施設からの移動などでスタッフは常時7～8名を維持し、難度の高い手術にも挑んでいます。2016年1月から医療器機ロボットのダヴィンチXiを導入し、県下で最初のロボット支援による腹腔鏡下胃切除と直腸切除を行い、10年間で600例を超えるロボット支援手術の実績を積み重ねています。

70歳頃に一念発起し、人生経験より私の人生訓「窮して困くるまず、憂こころいて意衰えず、事に挑んで逃げるな」をしたためました。揺るぎない信念と強靱な胆力をもって仕事に挑む方針で生きてきたのではと思っています。

仕事を離れて田舎の山野でシイタケ・栗・竹の子等の山の幸を大事にしながら、90歳まではゴルフを仲間と楽しみたい。エージシュート達成が夢です。体調良好を保つには快食・快眠・快便を日常生活で守ることが肝要であると心得ております。

